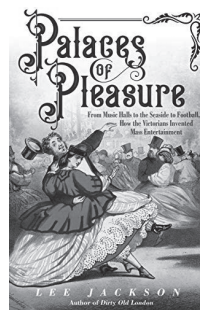


書 評

Lee Jackson,
*Palaces of Pleasure: From Music Halls to
 the Seaside to Football, How the Victorians
 Invented Mass Entertainment*
 (Yale University Press, 2019)



桐山 恵子

難解な学術書に立ち向かう意気込みで本著を読み始める読者は、出鼻をくじかれるかもしれない。なぜなら著者自身が“Introduction or, Expensive and Dangerous Amusements”で、執筆の目的はヴィクトリア朝の余暇活動に対する包括的な考察ではなく、当時の人々に新たな楽しみを提供した数々のレジャー施設の記録であると述べているように、本著は学術書というよりは種々雑多な事例が紹介されていく事典に近いような書物といえる。そのため膨大な事例からいかに取捨選択を行い、どのように解釈するかは読者の手に委ねられており、ここに本著の醍醐味があるだろう。以下、章立てに従って、有益かつ興味深いと思われる事例を紹介していきたい。

19世紀初頭、ロンドンに設置されたガス灯は、街路を明るく照らすことにより犯罪の減少という望ましい効果をもたらした。ところが一方で、暗闇に煌々と浮かび上がるジン・パレスの外観に取り付けられたガス灯は、炎に飛び込み命を落とす蛾のように、そこに集う人々を放蕩ゆえの悲惨な末路へと誘った(第I章“The Gin Palace or, The Abodes of Suicide”)。座席が設けられ互いに語らったりゲームをしたりすることにより、人々の交流の場として機能していたエール・ハウスとは異なり、ジン・パレスの原形であるジン・ハウスには座席がなく立ち飲みが基本だった。それゆえハウスの豪華版であるパレスでも、そこを訪れる最大の目的はひたすらジンを叩くことだった。ジン・パレスが非難された理由には、そこがお酒を提供する場だったという以上に、エール・ハウスが培ってきた人々との絆を断ち切ってしまったこともあるのではないだろうか。

エール・ハウスの伝統を受け継いだ場としてのパブが取り上げられるのが、第Ⅱ章“The Free-and-Easy or, The Glorious Apollo”である。パブでは気心のあう仲間が集まり、ゲームやダンス、歌などを楽しんでいたが、とくに歌を得意とする人々の中から合唱クラブが誕生することもあった。これがアマチュアの趣味だったパブでの歌が商業化していくきっかけのひとつとなり、ミュージック・ホールの誕生へとつながっていくのである。

イギリス初のミュージック・ホールとしては、1854年にランベスにオープンしたチャールズ・モートン経営のカンタベリー・ホールが知られているが、実はミュージック・ホールと名のつく劇場はそれ以前から存在していた(第Ⅲ章“The Music Hall or, He Slept on the Piano”)。しかし他のホールとカンタベリー・ホールとの違いはその規模にあった。シャンデリアで飾られ、コリント様式の円柱が立ち並んだ新古典主義の豪華なホールは2000人近くの集客数を誇った。さらに経営者としてのモートンの戦略は際立っていた。彼は演目に上品なオペラを取り入れるなどして、男性だけではなく女性や子供も顧客対象としたファミリー・ビジネスを謳ったのである。しかし逆に言うのなら、そうまでして「お上品さ」(“respectability” 58)を強調しなければならないほど、ミュージック・ホールの不道德な烙印を消し去ることは困難だったのである。そしてようやくそれが果たされるのは、パレス劇場でジョージ5世御前公演が行われた1912年だが、それは後に映画館にとって代わられることになるミュージック・ホールが放った残照のようだった。

第Ⅳ章“The Dancing-Room or, The Way of the Whirled”では、ヴィクトリア朝の人々が実際に踊っていた施設が紹介されていく。19世紀初頭のダンスは、ジェイン・オースティンのヒロインの残像がよぎるような「舞踏会場」(“the assembly rooms” 95)を中心として行われていた。しかし世紀半ばになると、新興階級が入り混じるようになった舞踏会場でのダンスを上流の人々は避けるようになり、彼らは公の場ではなく自宅での開催を好むようになる。一方、舞踏会場の入場料金を支払う余裕のない人々はパブで踊っていた。パブの主人がダンスする人々のために、フィドラー弾きや即興の音楽家を雇い入れることは頻繁に行われていた。さらに海岸地域のパブでは「舞踊室」(“dancing-rooms” or “dancing-saloons” 98)が設けられ

ることもあった。なぜなら長旅帰りの水夫は、つかの間の気晴らしを求めてとくにダンスへの欲求が強かったからである。

1840年代のポルカ流行の追い風を受けて相次いでオープンしたのが、鏡や造花で豪華に内装されたカジノだった。そこで供されるシャンパンやカクテルとともに、人々は「野蛮で放埒な跳ね回り」(104)と揶揄されたポルカを狂ったように踊り続けたのである。また元来、ダンス・アカデミーとは、文字通りダンスを習う場所を意味していた。ところがアカデミーと名はついているものの、生徒に「コーヒー・カード」(100)を買わせるような偽アカデミーも多数存在していた。名目だけのダンス教師は、音楽とダンスの営業許可証の取得を免れるために、自由にダンスを楽しむ人々を生徒扱いしていたのである。

第V章で取り上げられる“The Pleasure Garden or, The Midnight Roysterers”に通った人々も、オーケストラ演奏とともにダンスを楽しんでいたことは間違いはない。しかしプレジャー・ガーデンにはより大がかりな楽しみがあった。代表的なものはクレモン・ガーデンズの代名詞でもあった花火である。単独で打ち上げられるだけでなく、サーカスやバレエなど他のパフォーマンスとの共同演出がなされたり、クリミア戦争やインド大反乱をテーマにした花火ショーが行われたりもした。さらに花火にとどまらず、例えばヴォクソール・ガーデンズでは熱気球の打ち上げが行われた。人間を乗せただけでなく、上空の気球からパラシュートを装着させた猫や猿を落下させたり、馬を気球の下に括り付けて空中に持ち上げたりしていたのである。動物愛護者からの非難、さらにパイロットの事故死といったような否定的な面もあった一方で、科学技術を駆使した花火や気球を用いて集客していたプレジャー・ガーデンは、人々を啓発する肯定的な面もあったように思われる。

最先端の科学技術のお披露目となったのが1851年に開催された万国博覧会である。開催期間中には予想以上の人々が訪れ大成功を収めたが、実は博覧会が人々の関心を引いたのは開催以前からだった。なぜならジョセフ・パクストン設計のクリスタル・パレスが組み立てられていく過程を見るために、建設現場への入場チケットが5シリングで販売されていたのである(第VI章“The Exhibition Ground or, The City of Side-Shows”)。当時

の人々にとって、鉄とガラスで作られた建物はそれほどまでに珍しかったのだ。クリスタル・パレスは博覧会終了後シドナムに移築され、商業施設として利用された。シドナムには新駅が建設され、人々はロンドンから鉄道に乗って、ピアノなどの贅沢品が並べられた商品展示ルームに足を運んだのである。

ヴィクトリア朝のレジャーにとって鉄道が果たした役割については言うまでもないが、交通の利便性という点で蒸気船の役割も見逃すことは出来ない。マーゲートは元来、穀物を輸送するための港に過ぎなかったが、18世紀後半には上流階級の人々が集うリゾート地になっていた(第七章“*The Seaside or, A Triumphal Car for Neptune*”)。そして1815年に導入された蒸気船はロンドン・マーゲート間を往復し、多くの人々を運んだ。蒸気船内では観光客向けにバンド演奏が行われ、人々は軽食を取りながらゲームを楽しんだ。平日はロンドンで働くが、週末になると蒸気船で家族のために借りたマーゲートの邸宅に戻る裕福なビジネスマンまで現れ、土曜日の夕方の蒸気船は「夫のボート」(“*husband's boat*” 188)として知られるようになった。

マーゲートのような海辺リゾートに欠かすことのできないものとして栈橋があるが、栈橋を垂直にした建築物ともいえる塔を建設した一例がブラックプール・タワーである。1894年にオープンし、高さ500フィートを誇ったタワーは、エレベーターと螺旋階段を利用して頂上の「カラスの巢」(“*Crow's Nest*” 213)まで登ることが出来た。タワーは観光客に素晴らしい眺望を提供し、さらに鉄道の車窓からも見る事が出来たため、ブラックプールの広告塔として大いに役立った。

ヴィクトリア朝に興隆したミュージック・ホールやプレジャー・ガーデンの人気は長続きしなかった。対して現在に至るまで人気を維持しているのがフットボールだ。19世紀初頭には「地元の催しや祭りにのみふさわしい、時代遅れの粗野で無骨なお楽しみ」(第八章“*The Football Field or, To Brutalise the Game*” 219)と考えられていたフットボールが、世紀半ばになると人格形成に役立つとしてパブリック・スクールで取り入れられるようになった。1863年に結成されたフットボール協会(“*The Football Association*” 219)が定めるまでは明確な競技ルールがなく、例えばイート

ン校やハロー校ではボールを手を持つことは違反だったが、ラグビー校では認められていた。当時はフットボールとラグビーの境界線が明確ではなかったと考えられる。

パブリック・スクール卒業生を中心としたいわゆるジェントルマンで組織されたフットボール協会はアマチュア精神にこだわりがあった。しかし労働者階級でも高まりを見せていたフットボール人気をビジネスチャンスと捉えた実業家たちは、フットボールのプロ化を進めていった。フットボール産業に参入した人の中には、すでに他分野で活躍した人も多く、例えば1867年にシェフィールドで自分の名前を冠した「ユードン・カップ」(“the Youdan Cup” 229)を開催したトマス・ユードンは、元々ミュージック・ホール経営者だった。

本著の著者が“Conclusion or, The Murderer of Thought”で、「この本全体を貫いている一本の糸はお金である」(256)と主張するように、人々が余暇にお金を費やすことに目をつけたヴィクトリア朝の実業家にとって、レジャーの種類はもはや問題ではなく、それがお金のなる木でありさえすれば成長させる価値があったのである。もちろんその木は、現代のレジャー産業においても繁茂している。しかし忘れてはならないことは、レジャー産業はお金の木だけではなく、人々に楽しみを提供することにより幸福の木をも育ててきたことである。感染症の影響により、我々の余暇に対する概念そのものが変革を迫られている今、本著に記録された様々なヴィクトリア朝のレジャー施設とそれに携わった人々の営みは、これからの幸福なレジャー産業を考えていくうえで重要な示唆を与えてくれるに違いない。

一同志社大学准教授